びうた』(七三)、舟崎克彦『ぽっぺん先生の日曜日』(七三)などに、ナンセンスの香りを嗅ぐ。　(原　昌)

南部修太郎(なんぶしゅうたろう)　一八九二～一九三六(明25～昭11)　小説家。宮城県仙台市に生まれ、慶応大学文学科卒業。在学中から「三田文学」に翻訳や小説を発表。卒業後同誌の編集に従事。三年後、芥川龍之介に師事し、文筆生活に入る。『若き入獄者の手記』(一九二四)、長編『返らぬ春』(一二)その他の著作がある。児童ものは「赤い鳥」に『小人の謎』(一八)をはじめ三作を、「童話」に『笛の手柄』(一六)一作を寄せている。ほかに多くの令女小説・少女小説があり、『鳥籠』(一一)、『月光の曲』(二七)などに収録されている。　(関口安義)

ニ

新関健之助(にいぜきけんのすけ)　一九〇〇～五三(明33～昭28)　漫画家。東京浅草に生まれ、東京府立第三中学校卒業。区役所勤務、挿絵画家を経て、漫画に専心する。戦前は新関青花名で、『トツカン水兵』(一九三四)、『象さん豆日記』(三九)、『北極探険』(四〇)など、主に中村書店で単行本を出版。戦後は雑誌に舞台を移して、良心的な幼年漫画を数多く残した。代表作にユーモアあふれる動物漫画『かば大王さま』(一九四九～五三「小学三年生」)がある。　(竹内オサム)

新美南吉(にいみなんきち)　一九一三～四三(大2～昭18)　児童文学作家。本名正八。新美は母方の姓。愛知県知多郡半田町に生まれる。中学二年のころから文学に興味をもち童話、童謡、詩、小説など広く読み上級生と同人誌「オリオン」を出す。一九三一年中学を卒業。小学校代用教員を務めるかたわら「赤い鳥」に投稿、童話『正坊とクロ』『張紅倫』などが入選、またその童謡も北原白秋に認められ、門下の巽聖歌らによる童謡誌「チチノキ」に参加する。翌年東京外国語学校英語部に入学。『ごん狐』はこの年の「赤い鳥」一月号に掲載されている。しかし白秋が鈴木三重吉と不和、「赤い鳥」を去ったことで、門下の巽とともに南吉も「赤い鳥」を離れる。三五年、童話集刊行の話がありユニークな幼年童話三〇余編を一気に書くが、刊行に至らなかった。三六年卒業したが志望の教職につけず、神田の貿易商会に勤めたが、二度目の喀血をして帰郷。翌三七年郷里に近い河和小学校の助教、さらには杉治商会で、屈辱的低賃金の生活の中で悶々として日を送ったが、三八年県立安城高女の教諭となり以後生活の安定の中で

©1988　日本児童文学学会

作品を書けるようになった。中山ちゑとの恋愛もこの時期である。五月から江口榛一の斡旋で「哈爾賓日日新聞」に小説『最後の胡弓ひき』『久助君の話』『花を埋める』を、翌年に中央の雑誌「婦女界」へ『銭』を、また巽聖歌編集による「新児童文化」に『川』を発表して作家としての地位を得た。四一年一一月『良寛物語・手毬と鉢の子』を学習社から出版、印税千三百円を得た。教育活動にも熱心で、生徒にガリ版詩集をつくらせたりしたが、自作の詩も載せ、また学芸会上演用としての脚本『ランプの夜』『ガアコの卒業祝賀会』を書いたりもした。四二年一月前後から重症的喀血を繰り返して死を覚悟したが、春には回復、ふたたび旺盛な意欲で書きはじめ、第一童話集『おぢいさんのランプ』(一九四二)を、刊行した。さらに八月郷土の偉人『都築弥厚伝』を書くための取材を開始したが、秋に病気再発して悪化の一途をたどり、翌年三月三〇歳で死去した。同年九月『花のき村と盗人たち』『牛をつないだ椿の木』が刊行された。南吉の短い文学活動を概観すると、第一期―「赤い鳥」に童話、童謡を投稿した時代、第二期―外語学生として広く小説、翻訳を学び、作品世界を広げた時代、第三期―郷土庶民の生活感覚に根をすえた巧みな物語構成によるいわゆる民話的メルヘンを執筆した晩年に分けることができる。なお南吉作品は、戦後GHQの検閲などの事情もあって、やむをえず編者によって一部改変され、それがさらにそのまま多くの流布本となって刊行されたままであったが、『校定新美南吉全集』全一二巻・別巻二(一九八一～八三)によって正された。

[ごん狐](ごんぎつね) 童話。一九三二年「赤い鳥」に発表。一七歳の作品。のちに投稿して「赤い鳥」に載る。ごんげん山の狐、中山のお殿さま、兵十など、郷土の風光や事物、人物を巧みにモデルとしたリアリティーに富む描写と、ストーリーの屈折によるドラマ性ある話づくりはみごとだが、それは「早稲田文学新聞」に発表した『童話に於ける物語性の喪失』にみる童話観と一致している。検定国語教科書に掲載され広く読まれた。

[牛をつないだ椿の木](うしをつないだつばきのき) 童話。一九四三年「少国民文化」に発表。死の前年に書かれた。街道を通過する村人たちのため、井戸を掘る海蔵の苦心談だが、テーマの明確さ、起伏あるストーリー、人間観察の妙、時にユーモラスな筆致などで代表作の一つに数えられる。

【参考文献】佐藤通雅『新美南吉童話論―自己放棄者の到達』(一九七〇 牧書店)、巽聖歌『新美南吉十七歳の作品日記』(一九七一 牧書店)、浜野卓也『新美南吉の世界』(一九八一 講談社文庫)

(浜野卓也)

ニェムツォバー ボジェナ Božena Němcová 一八

©1988 日本児童文学学会

二〇〜六二　チェコスロバキアの代表的女流作家。エルベン、クビンと並んでチェコおよびスロバキアの神話や民話を収集、編集し、一八世紀末から一九世紀半ばに起きた民族復興運動を通じて女性の地位向上と解放運動に大きく貢献した。ウィーン生まれ。ラチボジツェの谷の祖母のもとで育ち、この時得た知識や体験から生まれた『おばあさん』(一八五五)は当時の民衆の生活を描いた不朽の名作である。　(保川亜矢子)

仁木悦子(にきえつこ)　一九二八〜八六(昭3〜61)　小説家、児童文学作家。本名二日市三重、別名大井三重子。東京に生まれ、四歳のとき胸椎カリエスにかかり寝たきりの生活となり、小学校へ行かず二人の兄より読み書きを授かる。兄の出征後は読書とラジオで独学、長兄は戦死し、その意味を問う意味で、後年、戦争で兄を失った妹たちの集り〈かがり火の会〉をつくる。一九五四年ごろより、日本児童文学者協会の新人会に加わって童話を試作。同じく身障者で歌人・翻訳家の二日市安(筆名後藤安彦)と結婚ののちに書いた推理小説『猫は知っていた』(五二)で第三回江戸川乱歩賞を受賞、以後推理小説家としての道を歩んだ。作品に『林の中の家』(五九)、『粘土の犬』(五八)など。児童文学作品も書きつづけ、長編『消えたおじさん』(六一)のほか、大井三重子名で出した童話集『水曜日のクルト』(六一)などがある。不自由な生活を慰めてくれる友として猫を愛し、その愛護のための運動にも力をそそいだ。　(細谷建治)

ニコルソン　ウィリアム William Nicholson 一八七二〜一九四九　イギリスの画家、挿絵画家、絵本作家。富裕な実業家の子に生まれ、パリのアカデミー・ジュリアンで絵を学ぶ。イギリス在住のアメリカの画家ホイッスラーの影響を受けた油彩、木版画で肖像画、風景画、静物画を描いた。最初の妻の弟と組んでポスター画をイギリスで最初に描く。その長男ベンがのち抽象画の雄となる。次の妻との子ライザと先妻の子ナンシーの子、すなわち孫とに手づくりのぬくもりのある絵本『かしこいビル』(一九二六)、『*The Pirate Twins* ふたごの海賊』(一九)をつくる。それより先一九二二年にM・ビアンコの『ビロードうさぎ』に木版挿絵を描く。いずれも生きた古典として今も愛読されている。ほかに『ピーター・パン』の舞台背景と衣装のデザイン(〇四)も行う。また、『*An Alphabet* アルファベット』(一八九八)、『まっ四角な動物の本』(九九)など大人向けの絵本もつくった。　(吉田新一)

西内ミナミ(にしうちみなみ)　一九三八〜(昭13〜)　児童文学作家。西内みなみでも作品を発表。本名南(みなみ)。京都市の生まれ。東京女子大学社会学科卒。学生時代から創作をはじめ「バオバブ」同人。コピーライターを経て創作に専念。低年齢の子ども向けの作品が多く、処女

©1988　日本児童文学学会

作の絵本『ぐるんぱのようちえん』(一九六五)は、根強い人気がある。『おもいついたらそのときに!』(八二)など全体に作風は愉快で明るい。地域の子ども文庫活動や図書館設立にも積極的に携わっている。(鈴木千歳)

西川祐信(にしかわすけのぶ)

西川林之助(にしかわりんのすけ) 一九〇三〜七六(明36〜昭51) 童謡詩人、民謡作詞家。奈良県生まれ。吉野農林学校卒。歌誌「心の花」や詩誌「関西詩人」などに拠り、短歌、詩、民謡を書きながら童謡の創作にも努めた。一九三四年『童謡の作り方』を著して注目されたが、その後は主として民謡の作詞に力を注ぎ、『河原よもぎ』など四冊の民謡集を残した。童謡集には『蛍と提灯』がある。(畑中圭一)

西沢正太郎(にしざわしょうたろう) 一九二三〜(大12〜) 児童文学作家。埼玉県入間市に生まれる。中央大学法学部卒業後、兵役につく。戦後、小学校教師となり福田清人に師事して「文芸首都」「農民文学」「新潮」などに小説や評論を発表するも、一九六一年『プリズム村誕生』で講談社児童文学新人賞に入選。以後、児童文学ひとすじに打ち込む。『青いスクラム』(一九六五)で第一五回小学館文学賞受賞。主な作品に『クリスタルの花』(六九)、『野っぱらクラス』(六九)、『算数はかせ号のまほう』(七五)などがある。短編集に『夜なんかきえろ』(七一)、研究書に『壺井栄—人と作品』(八〇)がある。作品は手堅く、いささかまじめ過ぎる作品が多いものの、機械文明の中からどうやって人間性を取り戻すか、理想主義風の文学姿勢で力強く問いかける。現在は退職後文筆生活を送っているが、作品のほかに児童文学の書評や作品論も数多く発表している。(西本鶏介)

西田良子(にしだよしこ) 一九三一〜(昭6〜) 評論家、児童文学研究家。福岡に生まれる。早稲田大学大学院文学研究科修了。卒論は宮沢賢治の童話研究。大学院では、「赤い鳥」を大正・昭和の文芸思潮と対比研究する。主著に、『日本児童文学研究』(一九七四)、『現代児童文学研究』(八〇)、『宮沢賢治論』(八一)などがある。北海道の国学院女子短期大学助教授を経て、現在、大阪国際児童文学館総括専門員。現代作家まで幅広く手堅い研究を行う。(畠山兆子)

©1988 日本児童文学学会

西野辰吉（にしのたつきち）　一九一六～（大5～）　作家。北海道天塩国生まれ。高等小学校を卒業して、足尾銅山の発電所で雑役夫になったころから小説を書きはじめる。上京して、職業を転々。戦後、新日本文学会に入会。小説の代表作は、『秩父困民党』（一九五六）。児童読み物に、アイヌの少年と子熊の心の交流を描いた『カネランと子熊』ほかを収録の短編集『母のいる山』（四八）、熱血野球小説『栄冠の蔭に』（四九）、西洋怪奇名作『幽霊屋敷』（五五）などがある。（宮川健郎）

西原慶一（にしはらけいいち）　一八九六～一九七五（明29～昭50）　国語教育者。一九一八年香川師範卒。日本女子大学附属豊明小学校主事を務め、児童の文章を集大成した『日本児童文章史』（一九五二）を著す。国語教育研究者としても名高く、実践国語研究所長として、戦前戦後の国語教育の全国的な組織と発展に貢献した。日本作文の会、日本国語教育学会の創立にも中心的役割を果たす。戦後は、学習指導要領試案の作成、国語審議会委員を務める。また日本女子大学名誉主事、同評議員でもあった。（倉沢栄吉）

西巻茅子（にしまきかやこ）　一九三九～（昭14～）　絵本作家、絵本画家。東京都出身。東京芸術大学工芸学科卒。リトグラフ、エッチングを学ぶ。一九六六年日本版画協会展で奨励賞、翌年新人賞。六七年処女作『ボタンのくに』を刊行。『わたしのワンピース』（一九六九）、『まこちゃんのおたんじょうび』（六八）ほか多数。共著では『はけたよはけたよ』（七一）、『ちいさなきいろいかさ』（七一　サンケイ児童出版文化賞）。童話の挿絵では『ミュウのいるいえ』（七二）など。（山本道子）

西村繁男（にしむらしげお）　一九四七～（昭22～）　イラストレーター、絵本作家。高知生まれ。中央大学商学部卒。絵本に『おふろやさん』（一九七七）、『にちようい ち』（七九）、『そんなことって、ある？』（八一）、『やこうれっしゃ』（八三）、『むらの英雄』（八三）などがあり、独特のムードを漂わす。『むらの英雄』から絵柄がやや抽象的に変わった。（奥田継夫）

西村　滋（にしむらしげる）　一九二六～（大15～）　小説家。名古屋市に生まれる。幼児期に母と父を失い孤児となり、収容生活から放浪の生活を経て、職業を転々とした。戦争孤児たちに取材した作品を書き続けてきた。涙と笑いの人生ものを大衆性をもつ文体で創作活動を推進。映画化された作品も少なくない。代表作に『雨にも負けて、風にも負けて』（一九七五　日本ノンフィクション賞）、『母恋い放浪記』（八四　路傍の石賞）、ほかに『お菓子放浪記』（七六）、『笑わない青春』（七八）などがある。（滑川道夫）

西村酔香（にしむらすいこう）

©1988　日本児童文学学会

西村芳藤（にしむらよしふじ）　一八二八～八七（文政11～明20）　浮世絵師、おもちゃ絵画家。本名西村藤太郎。号一鵬斎。本郷春木町、のちに浅草三筋町に住む。三世豊国、一世広重と並び、江戸後期の歌川派を代表する一勇斎国芳の弟子。美人絵、芝居絵、草双紙の挿絵、さらに横浜絵に力を注いだが、とくに少年少女向けの出版美術に強い関心を示し、これを一生涯得意の分野とした。双六そのほかのゲーム類、今日「おもちゃ絵」と呼ばれる実用錦絵、千代紙、着せかえ人形、絵本や往来物の挿絵、組上げ燈籠などの各ジャンルで、数多くの優れた作品を発表し、世間で「おもちゃ芳藤」と称せられるほどであった。芳藤の細工絵には無駄がなく、そのできあがりはまとまりが良い。また双六や細工絵を含むおもちゃ絵には、文学、歴史、伝説、自然現象、ことば遊びやわらべ唄などを素材にしたものが多く、美しい画面と興味あふれる内容がみごとに溶け合った作品が多い。歿後も再版や遺作の発表が続き、大正、昭和に入るとしばしば復刻され、人々の記憶から完全に消え去ることはなかった。芳藤は弟弟子の落合芳幾、河鍋暁斎、梅堂国政などとともに、江戸から明治にかけて、児童出版文化の橋渡し役を務めた注目すべき人物である。なお、幕末のころから「よし藤」という落款をもたびたび使った。

（アン・ヘリング）

西本鶏介（にしもとけいすけ）　一九三四～（昭9～）　児童文学評論家、児童文学作家。本名敬介。奈良県高市郡（現大和高田市）に県庁役人の長男として生まれる。年少時、中川正文の行った子ども会に参加。大学三年時に句集『薔薇と母』を出版。鶏介は本来俳号である。国学院大学国文科卒後、医学系出版社勤務。やがて文筆を志し、はじめは山本和夫主宰の同人誌「トナカイ村」に加わる。一九五〇年代からの伝統批判、新文学提唱の時期には、伝統擁護の立場から『児童文学の伝統と創造』（一九六三）、『こんにちは未明おじさん』（六五）などを発表、頭角を現した。以降、社会主義リアリズム系に抗してロマンティシズム、ファンタジーの文学を唱え一貫する。主著は評論集に『児童文学の創造』（七〇）、『空想と真実の国』（七四）、『児童文学名作のふるさと』（八〇）、『子どもの本の作家たち』（近・現代二冊、八二、八三）、『文学のなかの子ども』（八四）。民話の再話も多く『日本昔話集』（七二）など、創作に『うみをかけるうま』（八一）、『おとうさんやくそくだよ』（八

©1988　日本児童文学学会

五)など。共著・編著も少なくない。また各種文学賞の選考委員を務め、新人発掘にも寄与。（宮崎芳彦）

二反長半（にたんおさ なかば） 一九〇七～七七(明40～昭52) 童話作家、少年少女小説作家。大阪府茨木市に生まれ、法政大学国文科を卒業。在学中から同郷の川端康成に師事し、一九三五年ごろより児童文学の作品を書き、四一年少年文芸懇話会を主唱結成。同人誌「少年文学」を山本和夫、久保喬、永井明、新井淳一らとともに発行。戦時中は日本少国民文化協会理事、戦後日本児童文芸家協会理事を務め、現代少年文学作家集団を主宰するなど常にリーダー的活動をした。作品は少年小説『桜の国の少年』(一九四一)、『子牛温泉』(六〇)、『あすなろの星』(七一)、『忍者かげろうの風太』(六八)、童話集は『心のふるさと』(四五)、『みかん山のぬす人』(四七)などがあり、作風は写実的だが同時に牧歌的でロマンティックな性格のものが多い。童話『子牛の仲間』(七八)で小学館文学賞を受賞。評論集には『少国民文化論集』(四二)、『児童文学の展望』(六九)がある。（久保 喬）

日曜学校(海外)（にちようがっこう・かいがい） sunday school 宗教団体、とくにプロテスタント系の教会が日曜日や祝祭日に青少年を集めて行う宗教教育や一般教育の場をいう。記録に残っているものとしては、産業革命によって増加した年若い労働者に宗教教育と読み書き教育をすることを目的として、一七八〇年、イギリスのグロスターでロバート・レイクス(一七三五～一八一一)のはじめた学校が最も古い。公的な教育制度が完成するまで庶民の教育機関として大きい役割を果たした。宗教や道徳を教えるための教科書づくり、教師のマニュアルづくりがはじまり、一七八六年トリマー夫人が、一七八九年にはハナ・モアが運動に参加した。ハナ・モアのかかわった学校は五〇〇人以上も生徒を集め、教材を『*Cheap Repository Tracts* 廉価版小冊子』(一七九五～九八)の名で出版しその中から『*The Shepherd of Salisbury Plain* ソールズベリー平原の羊飼い』を生み出している。一一四冊の内、五〇冊までが彼女の手になるもので、大量出版の先駆として、その成功が、宗教小冊子協会(一七九九～現在)という組織の母体となった。また日曜学校で教えることが婦人のボランティア活動となっていった。一九世紀に入って、一般教育が公教育に移ると、宗教教育に専念することになり、教会ごとに組織されることになった。一八三〇年、日曜学校連盟ができている。初期の極貧の子どもの教育機関から、幅広くあらゆる階層の子どもの宗教教育の担い手として、世界的なネットワークができ、子どもの本のマーケットを著しく広げることになった。聖書を無料配布したり、ジェイムズ・ジェインウェイの『*Token for Children* 子どものための贈り物』(一六

©1988 日本児童文学学会

七一～七二)やアイザック・ワッツの『聖歌』などを出し、ロングセラーにした。これらの日曜学校連盟の出版物は宗教教育を推奨するための賞品として使われ、また自身も日曜学校の生徒であったシャーロット・ヤング*が、『*What Books to Lend and What to Give* 推薦図書リスト』(一八八七)をつくるほどになっていった。日曜学校は、アメリカ(一七八六)、ドイツ(一八二四)と広がり、日本でも明治初期に開かれた。(三宅興子)

日曜学校(日本)(にちようがっこう・にほん) 宗教団体が、子どもの宗教教育のために、休日を利用して開く学校をいう。我が国の日曜学校は、一八七二年(明5)三月、横浜山下町に創設されたプロテスタント派の海岸教会が、同時期に開いた日曜学校がはじまりとされる。同じ年の一一月、メソジスト教会のソーパル宣教師が、東京築地明石町の住宅で「安息日学校」を開き、続いて同年暮れには、神戸元町でも「安息日学校」が開かれた。こうして、各地のキリスト教会に日曜学校が開かれるようになり、一九〇七年(明40)にはキリスト教各派の日曜学校が集まって「日本日曜学校協会」が結成され、一四年(大3)からは機関誌「日曜学校」も発行される(この機関誌は一九四一年一二月、太平洋戦争開戦まで通巻三三二号を出して終刊。同時に財団法人日本日曜学校協会も解散している)。このキリスト教日曜学校が母体となって、児童文学や児童演劇、子どもの音楽・舞踊などが生まれ、我が国の児童文化の発展に大きな影響を与えたことは注目されてよい。日曜学校は、キリスト教だけでなく、仏教にもみられる。一八七二年に仏教教育に基づく子ども会が博多の万行寺で「児童念仏講」として生まれ、八〇年には芝増上寺で「少年講」が開かれている。これらは仏教日曜学校のはじまりといってよいものだった。しかし、仏教日曜学校が本格的に組織されるのは、明治期後半、キリスト教日曜学校の影響を受けて出発してからである。一九二五年(大14)には「仏教日曜学校協会」が組織され、機関誌「宗教教育」も発行され各地に普及、三〇年代を最盛期にキリスト教日曜学校に劣らぬ発展をみせた。

【参考文献】日本日曜学校協会編『日本日曜学校史』(一九四一日曜世界社。執筆は上沢謙二)、斎藤昭俊『近代仏教教育史』(一九七五 国書刊行会)

(冨田博之)

新田次郎(にった じろう) 一九一二～八〇(明45～昭55) 小説家。本名藤原寛人。長野県上諏訪町に生まれる。無線電信講習所本科(現電気通信大学)卒業。一九三一年『強力伝』により第三四回直木賞を受賞。以来山岳小説といわれる独自の作品を書く一方、時代小説なども手がけ、児童文学作品としては高校受験期の少年少女像を描いた『風の中の瞳』(一九三三)がある。直木賞作家が受賞後、いち早く少年少女向きに出した小説として注目に値する。(西本鶏介)

©1988 日本児童文学学会

ニーベルンゲンの歌（ニーベルンゲンのうた） Das Nibelungenlied 中世ドイツの英雄叙事詩の代表的傑作。一一九〇年から一二〇四年の間にパッサウあたりで書かれる。その背景には五、六世紀の史実がある。第一部はメロヴィング王朝のお家騒動が、第二部はフン族とブルグント族の戦いが取り扱われている。一七五五年に写本が再び発見されて以来ワーグナーの『ニーベルンゲンの指輪』など多くの翻案を生んでいる。また雄大な国民叙事詩としていろいろな作家によって再話の形で児童にも近づきうるようにされ、学校の読み物としても広まっている。ショッペ『*Götter und Helden des Nordens* 北方の神々の英雄』（一八二二）などがその先駆である。日本では相良守峯などによって紹介されている。（植田敏郎）

日本一ノ画噺（にほんいちのえばなし） 絵本の叢書。後に丸善に吸収された中西屋書店が、一九一一年（明44）より一五年（大4）にかけて刊行、B7判くらいの小型本で、全三五冊。定価は一冊一三銭、五冊入りの麦藁細工の小箱や朴の木製の特製ケースを付けても売られた。文章は巌谷小波が担当、絵は杉浦非水、小林鍾吉、岡野栄が分担し、すべてシルエットで描かれている。内容はほぼ、『イツスンボウシ』『ウラシマ』などの昔話、『ウシワカマル』『タメトモ』などの伝記、『ネコノセカイ』『クルマトフネ』などの博物的メッセージの三類より成る。江戸時代の木版子ども絵本の堕落形態としての俗悪な銅版・石版絵本が流布していた明治末期において、西欧文化の匂いを感じさせるこの絵本叢書は、当時ようやく生まれかけていた近代市民的家庭に受け容れられ、近代日本絵本史の最初の指標をなしたともいえる。（永田桂子）

日本演劇教育連盟（にほんえんげききょういくれんめい） 子ども・青少年の演劇による教育運動を進める民間教育団体。大正期芸術自由主義教育運動の一成果とされる成城小学校の学校劇運動の影響を受けた東京市公立小学校教師たちによって、一九三二年（昭7）に創設された「学校劇研究会」が、大阪と名古屋の「学校劇研究会」とともに、三七年に結成した「日本学校劇連盟」を継承、第二次大戦後、四九年に再建された。五九年に「日本演劇教育連盟」と改称、現在に至っている。戦前の第一次の創立の中心人物は加藤光、落合聰三郎、米谷義郎らで、戦時中は「日本少年文化研究所」（三九～四一）、「日本少年文化研究会」（四一～）と呼ぶ同人組織として継続、戦後、落合、米谷、菱沼太郎、冨田博之らによって再建され、機関誌「学校劇」（六〇年から「演劇と教育」と改題）を中心に、全国的な研究協議会、各種セミナーの開催や、脚本集の編集などの事業を通して、学校と地域における演劇教育運動を推進している。（冨田博之）

日本お伽噺（にほんおとぎばなし） 巌谷小波による歴史的説話を

©1988 日本児童文学学会

素材とした物語叢書。ただし、史実に捕らわれずお伽噺として執筆。『日本昔噺』の姉妹編として企画。一八九六年(明29)一〇月から九九年(明32)一月までに、博文館より全二四冊を刊行。著者名は、「大江小波」の別号使用。付録として「少年世界」発表のお伽噺一編を添える。表題の歴史的作品より付録のお伽噺に小波の本領がみられる。挿絵は当時一流名家に新進を加え分担執筆。

(畠山兆子)

日本教育紙芝居協会(にほんきょういくかみしばいきょうかい) 第二次大戦中、紙芝居の出版や普及に中心的な役割を担った団体。東大セツルメント活動で紙芝居をつくった松永健哉らが、一九三七年(昭12)に紙芝居の普及のために「日本教育紙芝居連盟」を設立。翌三八年にこれを母体として大島正徳を理事長に発足。朝日新聞社の資本による「日本教育画劇」の制作発売協力を得て、出版普及活動は盛んになるが、これには紙芝居が国策宣伝に利用されたという背景があった。月刊誌「教育紙芝居」(一九四二年「紙芝居」に改題)発行。

(上地ちづ子)

日本キリスト教児童文学全集(にほんキリストきょうじどうぶんがくぜんしゅう) 全一五巻、別巻二巻、教文館。一九八三年(昭58)四月～八四年(昭59)四月。石森延男、小出正吾、佐古純一郎、神戸淳吉、藤原一生編集。本全集は、明治以降現代に及ぶクリスチャン作家の作品群の中から、説教色の無いキリスト教精神を文芸性豊かに表現し得たものを選んで編集された。七二年より刊行された『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻や七四年より刊行された『近代日本キリスト教全集』全一五巻につぐもので、キリスト教の立場から集成された児童文学の全集としては初の試みである。巌谷小波、久留島武彦、若松賤子、有島武郎、いぬいとみこなど児童文学の開花・発展に寄与した作家たちの作品が幅広く集められている。文芸性に乏しいものもあるが、児童文学史上意義ある刊行として評価されている。主な作品には坪田譲治『善太の四季』(一九三四)、太田博也『ポリコの町』(四八)などがある。

(大久保みどり)

日本子どもの本研究会(にほんこどものほんけんきゅうかい) 一九六七年(昭42)一〇月結成。「児童図書の研究をおこない、その普及と向上をはかる」ことを目的とする。子どもの本に関する研究専門団体である。会員は、子どもの本に寄稿している作家、評論家、研究者、編集者、教師、保母、図書館員、地域における児童文化活動家など多彩である。同会の具体的な活動内容として、「児童図書の専門的研究をふかめる。読書教員の理論と実践の研究をすすめる。地域社会の児童文化的施設と協力して、市民を対象とした読書相談をおこなう。児童図書の研究と普及に関する講演会・講習会などをひらく。」などのような事項が示されている。月刊「子どもの本棚」を機関誌として刊行し、別に研究誌「子どもの本棚」

©1988 日本児童文学学会

（臨刊）も編んでいる。雑誌による良書の紹介活動、ならびに日常の読書相談などによって、優れた子どもの本の発見とその普及とをめざし幅広い活動が行われている。（鈴木敬司）

日本作文の会（にほんさくぶんのかい）　一九五〇年（昭25）七月、「日本綴り方の会」が約三〇〇名の会員で発足。翌五一年九月、「日本作文の会」と改称。会の目的に「作文教育を中心とした実践研究の交流をはかりつつ、日本の教育の進歩発展のためにつとめます」とある。*生活綴方運動の伝統を受け継ぎ、その活動を展開している。機関誌「作文と教育」（月刊）を刊行。現在、会員約一万名を擁する有力な民間教育団体である。（鈴木敬司）

日本児童絵本出版協会（にほんじどうえほんしゅっぱんきょうかい）

日本児童演劇協会（にほんじどうえんげききょうかい）　東京都渋谷区神宮前に事務所を置き児童演劇の創造と普及発展を目的とする社団法人（一九六九年認可）。一九四八年児童劇作家協会として発足、学校劇脚本集や年鑑、雑誌「児童演劇」の発刊（五三～五八）などを行う。五八年児童演劇全般にかかわる団体として国内国際的にも我が国児童演劇を代表する組織とすべく日本児童演劇協会に改組。各種研究会・講習会のほか、六三年文部省（のち文化庁）の助成のもとに、児童劇僻地巡回公演を事業として例年化した。ちなみに八五年度の開催二六七日（二八四回）、小学校一八県、中学四県、参加劇団数二八である。カナダからビョンドワーズ劇団招聘（七九年、約二カ月）ほか。「劇あそび夏期講習会」は八六年第一七回。出版物に『日本児童演劇の歩み70年の年表』（七三）、『日本児童演劇の歩み80年の年表』（八四）、『全国小中学校演劇教育実態調査』（七八）、『年鑑日本の児童演劇1980』『年鑑日本の児童演劇1981』など。機関紙「児童演劇」月刊。年度賞として協会賞、斎田喬戯曲賞を設定している。（田島義雄）

日本児童劇協会（にほんじどうげききょうかい）　一九三三年（昭8）一月、早稲田大学演劇博物館で開かれた我が国初の「家庭用学校用児童劇展」を機に、作家、舞踊家、音楽家、教育家、劇団主宰者ら四九名で発足、理事*小寺融吉、霜田静志ほか。タブロイド判機関紙「児童劇」（五四号まで）、年刊『日本児童劇集』（一九三六、三七）、『児童劇名作選』（三八～四〇）など。事務局担当理事*伊達豊の

©1988　日本児童文学学会

努力もあり着実な歩みをみせつつ(会員数八六に)、四一年統制団体「日本少国民文化協会」へと吸収解散させられる。（田島義雄）

日本児童劇全集（にほんじどうげきぜんしゅう） 一九六一年(昭36)小学館より刊行、全四巻。巌谷小波の「お伽芝居」から現代児童劇まで、また学校劇で繰り返し上演の優れた戯曲を選んだ明治・大正・昭和三代にわたる代表作集。「斎田喬戯曲賞」制定発足の記念出版。第一巻四七、二巻四三、三巻四五、四巻四二、計一七七編。執筆一四九氏は、坪内逍遙『神楽師の息子銀吉』、巌谷小波『日の出神楽』、小山内薫『遠くの羊飼い』をはじめ、鈴木三重吉『ペテクラブ』、竹久夢二『盲目の少女』もあり、三好十郎『マツコとユミ子』、筒井敬介『コルプス先生動物園へ行く』など多彩。編集委員＝内山嘉吉『頭巾を祭る』、落合聰三郎『学校の門』、栗原一登『炎』、田中千禾夫『赤い羽根』、永井鱗太郎『梅の渡来』、宮津博『第一突堤』、監修＝秋田雨雀『埋もれた春』、伊藤熹朔、河竹繁俊、久保田万太郎『ブローニィー』、斎田喬『汚点』、武者小路実篤『仏陀と孫悟空』。各A5判四七〇～八〇ページ、ケース入り。各巻末に編集委員の分担執筆による「日本児童演劇史」を収録。（田島義雄）

日本児童出版美術家連盟（にほんじどうしゅっぱんびじゅつかれんめい） 児童出版美術家の団体。一九六一年度執筆の教科書用絵画が六五年度用に無断再使用されることに抗議するため、沢井一三郎ら一〇名を発起人として結成された教科書執筆画家連盟は、教科書協会と折衝し教科書に関する基本的美術著作権を確立。六四年八月一般図書の著作権確立も企図し「児童出版美術の普及発展並びに職能の擁護」を目的とし、新会員も加え前者より発展的に移行した職能的団体として日本児童出版美術家連盟(略称〝童美連〟、外国との関係上後年〝日本〟を冠す)を結成。一八九九年より空洞化していた出版美術著作権の確立につき出版関係と折衝、小学館美術著作権侵害裁判に象徴される確立運動などにより、創立一〇年後その基本的権利をほぼ確立。現在童美展開催、作品集刊行も行われ会員二八六名。その性格上児童出版美術に対する批評機能のもてない点に問題はあるが、日本童画会解散後の児童出版関係美術家たちの連帯拠点となり、今日も果たしつつある文化的、社会的役割は評価されるべきであろう。（久保雅勇）

日本児童文学（にほんじどうぶんがく） 日本児童文学者協会の機関誌。一九四六年(昭21)に創刊。同号は、編集関英雄、A5判、三二ページ。定価三円五〇銭。新世界社発行で、以来、長期、短期の休刊、合併号の刊行があるが、四〇年間にわたって月刊で発行を続け、八七年四月号をもって通巻三八七号で文学団体の機関誌としては最長記録であろう。編集の基本を単なる会内向けの機関誌ではなく理論と作品によって日本の児童文学全体の発

©1988 日本児童文学学会

展に寄与することにおき、編集は会が行い、発行は企業(主として出版社)に依嘱してきている。編集の実際は、理事会の選任する理事を責任者(編集長)とする編集委員会によって行われる。執筆者は会員が中心となるが会外の適任者にも依頼する。編集内容に限定はないが巻頭に特集関係の評論その他をすえ、ほかを作品、エッセイ、報告に当てるのが通例。会員その他の追悼号は資料的価値が高い。七七年からは、「日本児童文学創作コンクール」を開始し、創作、評論、詩、童謡を一般から募集し入選作を年一回誌上に発表している。また、「日本児童文学」の発行を経済的に支援する目的で出版元の意向を大幅に取り入れた「別冊」を不定期に刊行している。創刊以来、出版元の事情で休刊を余儀なくされることも多く会が自主発行した場合も少なくない。創刊以来、発行を引き受けた企業が次の一一社に及んでいることはそれを明示している。新世界社、東海出版、みかも書房、さくら教材、宣協社、河出書房新社、ほるぷ教育開発所、盛光社、偕成社、教育出版センター、同新社。創刊号以来の編集責任者は次の通り(就任順・責任者を含む)。関英雄、水藤春夫、猪野省三、塚原健二郎、高志信隆、柴野民三、大石真、古田足日、来栖良夫、岡本良雄、菅忠道、塚原亮一、鳥越信、石川光男、那須田稔、安藤美紀夫、北川幸比古、後藤竜二、木暮正夫。

【参考文献】『座談会・「日本児童文学」三百号の歩み』(一九八〇・四「日本児童文学」)、『日本児童文学総目次』(一九七八『児童文学の戦後史』東京書籍)、復刻版「日本児童文学(創刊号より第一次八冊、第二次一一冊)」(一九八〇　日本児童文学者協会)

(塚原亮一)

日本児童文化協会(にほんじどうぶんかきょうかい)　一九三七年(昭12)九月に統制指導機関として松本学の肝いりで発会、四一年に解散した文化団体。渋沢青花、伊達豊、藤沢衛彦、松原至大、前田晁、水谷まさる、村岡花子が当初の理事で、作家、口演童話家、童画家、作曲家などを組織し、事務局は東京市麹町区(現千代田区)内幸町大阪ビルの日本文化連盟内。月例会、講習会、展覧会などのほか、月報「日本児童文化」(一九三七・一二～四一・一?)の発行、作品集『建設童話・子供の天下』(四〇、大蔵省貯蓄奨励局委嘱)、逸話集『これこそ日本人』(四〇)の出版と活動は幅広い。なお、四一年一二月創立の日本少国民文化協会は同八月の準備委員会の時点まで同名を仮称したが、本協会とは別。

(宮崎芳彦)

日本児童文学学会(にほんじどうぶんがくがっかい)　一九六二年(昭37)一〇月に創立された児童文学・文化研究者によるはじめての学術団体。会員は約三〇〇名(一九八七)。会長は初代・石森延男、二代・滑川道夫(七八～)。事務局担当常任理事は冨田博之(八六～)。東京・関西・中京での月例研究発表会と年一度の大会、会報と紀要「児童文学研

©1988　日本児童文学学会

究」(年二回)の発行、年度学会賞・同奨励賞の贈呈などを行う。出版活動にも重きをおき、編纂刊行に『赤い鳥研究』(六五)、『アンデルセン研究』(七五)、『日本の童話作家』(七一)、『世界の童話作家』(七二)、『児童文学の世界』(七四)、『日本児童文学概論』『世界児童文学概論』『児童文学研究必携』(以上七六)など。会員が着実に増え、研究活動が盛んになってきた基盤としては、六〇年代にスタートした現代児童文学の作品的充実、母親層を中心とした児童読書運動の発展、教育や文学系の大学・短大・各種学校などにおける児童文学・児童文化講座の増設があげられよう。(宮崎芳彦)

日本児童文学者協会(にほんじどうぶんがくしゃきょうかい) 文学団体。児童文学の創作、評論、研究、翻訳の専門家を会員とし、職能団体と文学運動団体の二様の性格をもつ。終戦の年(一九四五)の九月、関英雄が発起して在京の友人数名と準備会をつくり、「赤い鳥」系、プロレタリア児童文学系、「童話文学」系などの諸流派を包含する幅広い児童文学の統一体の原案をまとめた。翌一九四六年三月一七日、創立総会を朝日新聞東京本社会議室で開催。会の組織、方向は原案通り承認され、初代会長に推挙された小川未明発案になる「児童文学者協会」と命名(五八に「日本」を加えた)。綱領は次の通り。1、民主主義的な児童文学を創造し普及する。2、文学によって児童の創造的な思考と欲求とをよび起す。3、児童文学の社会的地位を確立するために努める。4、児童文学者の思想・表現の自由を守り、その生活権の擁護に努める。5、内外の民主的な文化運動と提携する。(以上は、七三年の総会において創立時の綱領を若干修正した現行のもの)。六三年には、社団法人の認可を得、創立時には三九名の会員は八七年三月末現在、六四八名、地方支部一六で、我が国で最も有力な児童文学者の結集体。主な会活動は次の通り。月刊機関誌「日本児童文学」の編集発行、日本児童文学者協会賞、同新人賞の贈呈、各種講座、研究会の開催、会編集著作物の刊行、著作権、税金などの生活権擁護、国際交流、民主主義と子どもを守るための社会的発言と行動、会報「児童文学手帖」の刊行。会は、会長、理事長、理事(二五名)によって運営される。入会は、会員二名の推薦と理事会の承認が必要。歴代会長は、小川未明、秋田雨雀、藤沢衛彦、坪田譲治、酒井朝彦、與田準一、塚原健二郎、小出正吾、川崎大治、藤田圭雄。(就任順)。

【参考文献】日本児童文学者協会編『児童文学の戦後史』(一九七八 東京書籍)

(塚原亮一)

日本児童文学選(にほんじどうぶんがくせん) 児童文学者協会発行の年刊作品集。一九四八~五九年(昭23~34)。全六集。前史と考えてよいものに『幼年童話選・ねずみの町』(四八、一九編収録 川流堂書房)と『少年少女小説選集・赤いコップ』(四八、一〇編 紀元社)の対となる二冊があり、

©1988 日本児童文学学会

戦後を要約する。『日本児童文学選・年刊第一集』(三九編)は一九四八年七月刊、以下、二集(五〇、四九編)、三集(五〇、四一編)、四集(五一、三〇編)、五集(五三、二七編)、六集(五九、六三編)。一～四集は桜井書店刊、五・六集は『日本児童文学代表作集』と改めてあかね書房刊。収録作品は童話、小説、詩、童謡、劇で、五・六集に付された「展望・記録」は文学界と同協会の動向を語る好資料。なお劇については、別に同協会編、桜井書店刊『学校劇集』(五〇、小学校編・中学校編二冊)がある。同時期に刊行された日本文芸家協会編『少年文学代表選集』(四九～六二、計九集)を意識した編集で、お互いに方針なども異なるため、双方をもって戦後から現代への推移を作品に即して知ることができる。

(宮崎芳彦)

日本児童文学全集(にほんじどうぶんがくぜんしゅう)　全一二巻、A5判、各巻平均三五四ページ、河出書房刊。一九五三年(昭28)三月から五四年一月にかけて配本。編集委員は小川未明、坪田譲治、百田宗治、塚原健二郎、浜田廣介、酒井朝彦、古谷綱武の七名。童話編八巻のほか、詩・童謡編一巻、児童劇編一巻。少年少女小説二巻より成る。「作者の言葉」(現存作家の場合)を各集の冒頭に掲げ、巻末にしっかりした「かいせつ」を添える、といった工夫が光っている。折からの児童文学全集ブームの生んだ企画の一つであった。

(関口安義)

日本児童文学大系(にほんじどうぶんがくたいけい)　全六巻、B6判、各巻平均四三〇ページ、三一書房刊。一九五五年(昭30)五月から一〇月にかけて毎月一巻配本。編集委員猪野省三、菅忠道、熊谷孝、関英雄、巌谷栄二。折からの国民文学論に刺激され、「子供のための国民文学の創造」という願いのもと、近代以降の児童文学のエッセンスを集大成したもので、明治二〇年代から昭和二〇年代まで、一応時代を追って編まれている。内容は、(1)童話・小説・劇、(2)童謡・詩、(3)評論・声明書の三部構成をとり、巻末に解説と年表を付す。児童文学がとかく消耗品扱いされ、原典に当たるのが容易でなかった時代に、資料を掘り起こし集大成した意義は大きい。ただし収録本文は、厳密なテキスト・クリティークを経たものではなかった。中には本大系に収録するに際して大幅に省略されたもの、題名を改められたものなどもあって、研究上の本文(テキスト)として最善とはいえないのが欠点となっている。

(関口安義)

日本児童文学大系(にほんじどうぶんがくたいけい)　全三〇巻、菊判、各巻平均四五〇ページ、ほるぷ出版刊。二回にまとめて一括配本。第一回一九七七年(昭52)一一月、第二回七八年一一月。編集委員大藤幹夫、岡田純也、瀬田貞二、続橋達雄、鳥越信、藤田圭雄、向川幹雄。日本の近代児童文学作品の体系的集成を試みた初の本格的児童文学全集である。子どもの立場からの編集であり、未明・

©1988　日本児童文学学会

廣介伝統ともいえる芸術的児童文学作品ばかりでなく、大衆児童文学、それに童謡を重視するという斬新な視角が特色となっている。また本文収録に際しては、テキスト・クリティークを徹底させた点が、これまでの児童もの文学全集と一線を画している。文学的・歴史的、さらには資料的にみて貴重だと思われる七四人の作家の約二二〇〇編が、ここに厳密な校訂を経、集大成された。中でも童謡に作品番号をつけて整理した⑦の北原白秋の巻、一巻独立の⑯豊島与志雄の巻、大衆児童文学を正統に位置づけ巻立てした⑲佐藤紅緑・佐々木邦、⑳山中峯太郎・高垣眸、㉑吉川英治・大仏次郎、㉙南洋一郎・江戸川乱歩・海野十三らの巻、プロレタリア児童文学作家中心の㉚槇本楠郎ほか五人の巻などが目を引く。児童文学研究が学として成立するための礎石をすえたという点でも注目される画期的編集であり、本大系のもつ意義は、きわめて大きい。

（関口安義）

日本児童文芸家協会（にほんじどうぶんげいかきょうかい）　一九五五年（昭30）五月七日創立。六年後に社団法人。設立の趣旨は「次代を担う児童の精神や情操に関係深い児童文芸の健全な創造発展と文化の向上に寄与し、併せて児童文芸家の社会的地位の向上、生活権の擁護をはかるため、広汎な児童文芸関係者を以て組織し、職能団体として行動するものである」とうたわれている。事業として、「児童文芸」（月刊）を発行し、児童文芸講座の開催、アンデルセン邦訳七〇年記念講演会（一九五八）、グリム童話発刊一五〇年記念講演会（一九八二）、宮沢賢治三〇年忌記念講演会（一九六三）などを行った。さらに児童文化功労者の表彰、児童文学講座の開催、児童文芸家協会賞、同新人賞の制定、文部省国語審議会への代表派遣を実施して今日に至っている。初代会長は浜田廣介、現在、福田清人。理事長山主敏子。会員数三〇〇名、研究会員二〇〇名。『少年少女世界名作全集』『世界の伝記』などの企画、児童教育への示唆などを機関誌に発表する意欲を顕現している。

（村松定孝）

日本児童文庫（にほんじどうぶんこ）　全七六巻。総合的な児童文化叢書。刊行は一九二七年（昭2）五月～三〇年（昭5）一一月。北原白秋の弟鉄雄が経営する出版社アルスの発行。四六判、二冊で一円。装丁恩地孝四郎。挿絵には初山滋、岡本帰一ら多くの画家が協力した。巌谷小波『日本お伽噺集』（第一〇巻）、新村出訳『イソップ物語』（第二七巻）など文学のほか、歴史、古典、ノンフィクションと内容は多岐にわたる。同時期に刊行されたライバル全集の『小学生全集』とともに、子どもの本の円本時代をつくった。雑誌「赤い鳥」などによる大正児童文学の成果は、これらの廉価普及版によって広く流布したが、同時に新しい児童文学書の出版をおさえる結果をも生んだ。この二つのシリーズが児童文学

©1988　日本児童文学学会

の冬の季節を招いたとする見方もある。アルスは、三九年一一月に『新日本児童文庫』の刊行を開始、小川未明『夜の進軍喇叭』ほかを出したが、十数巻で中絶した。（宮川健郎）

日本少国民文化協会（にほんしょうこくみんぶんかきょうかい）　第二次大戦下において、児童文化生産関係者を一元的に統制するために設けられた情報局主管の社団法人。一九四一年（昭16）一二月創立。大政翼賛会文化部のもとにあり、出版活動は実行機関である日本出版文化協会（のち日本出版会）によって機能した。役員は理事長・小野俊一（一九四一～四四）、事務局長・上村哲弥（四一～四五、のち福田清人）。会員は一時約二〇〇〇名にのぼった。事務局は銀座三越内（四五・二まで、のち久留島武彦宅）。文学、絵画、童話（口演童話）、遊具、紙芝居、演劇、映画、舞踊、音楽、蓄音器、出版部会で構成。附属に少国民文化研究所。会報（四二・一一～）、機関紙「少国民文化」（四二・六～四四・一二）を発行。活動としては講演会・展覧会のほか、『少国民進軍歌』（四二）、『愛国いろはかるた』（四三）、『愛国子守歌』『少国民歌』（四四）を定め、少国民文化功労賞（四四、久留島武彦、小川未明）、同文化賞（四四、清閑寺健『江田島』）の授与を行った。四二年が盛期で、四三年末に報国挺身隊（五〇八名）を結成して慰問と工場動員に従った。四五年一〇月、占領軍により解散。児童文学はあげて枠内に入り、戦時国策文学・少国民文学は成立した。文学部会（幹事長・加藤武雄、のち吉田甲子太郎、塚原健二郎）は会の主軸を成した部会であって、独自に機関誌「少国民文学」（四三・五～七）、編著『少国民詩・年刊Ⅰ』（四四）、『少国民文学論』第一集（四五）を刊行。（宮崎芳彦）

日本少国民文庫（にほんしょうこくみんぶんこ）　少年読み物叢書、全一六巻。菊判、各三〇〇ページ、定価一円。新潮社刊。第一回配本は一九三五年（昭10）一一月刊の山本有三『心に太陽を持て―胸にひびく話二〇篇―』、最終配本は三七年（昭12）八月刊の吉野源三郎『君たちはどう生きるか』であった。この叢書は山本有三が菊池寛、豊島与志雄の助言のもと、新潮社の佐藤義亮に図って企画したもの。編集主任に吉野源三郎を迎え、山本有三系門下の吉田甲子太郎、大木直太郎、高橋健二、石井桃子らが参加、協力した。時代の重圧が加わる中にあっての良心的出版物であり、版を重ねた。執筆者は恒藤恭、石原純、豊島与志雄、水上滝太郎、里見弴らオールドリベラリストが多く、時局にとらわれることの少ない児童ものシリーズとなった。新潮社では、この企画の成功に気をよくし、本叢書が完結した二年後、百田宗治の協力を得て『新日本少年少女文庫』全二〇巻を、島崎藤村の名で編むこととなる。（関口安義）

日本少年（にほんしょうねん）　少年雑誌。実業之日本社発行。一九〇六年（明39）一月創刊。「本誌は小学生、中学生、店員、

©1988　日本児童文学学会

その他一般少年の良師友なり、材料豊富にして実益多く、趣味清新にして内容整頓せり。子供のある家庭にして本誌を備えざる処ありや」という創刊のことば通り、広い読者層を対象にした。初代主筆は星野水裏だったが、すぐ石塚月亭に変わり、その後有本芳水、渋沢青花と受け継がれた。月刊、春秋二回増刊号を発行。社の方針として社員の作品も掲載したため、星野水裏、石塚月亭、有本芳水、滝沢素水、渋沢青花、東草水などが競って筆を振るっている。最も人気があったのは、旅の抒情をうたった芳水の少年詩で、ほとんど毎号誌上を飾り「日本少年」の呼びものとなったが、それには挿絵を描いた川端龍子や竹久夢二の功績も少なくなかった。画家としては、渡辺与平、明石赤子、谷洗馬、中野修二、高畠華宵などが活躍している。初期は陸海軍人や政治家の功名談や懐古談、博士の理科読み物や歴史読み物が目立ったが、青花が主筆になってからは、この傾向は少なくなった。少年読者の興味をそそるため、「雪中富士にのぼり絶嶺より滑落ちて九死一生」式の長い題名をつけたり、「冒険」「滑稽」「奇談」などの角書をつけたり、また、種々の懸賞を設けて人気獲得に努めたりして、大正中期には、発行部数二〇万部を超え、大正期児童雑誌の筆頭となったが、昭和になると講談社の「少年倶楽部」にその主座を奪われ、三八年(昭13)一〇月ついに廃刊となった。

(西田良子)

日本伝承童謡集成（にほんでんしょうどうようしゅうせい）

日本伝承民俗童話全集（にほんでんしょうみんぞくどうわぜんしゅう）　日本民間説話の児童向き再話叢書。藤沢衛彦著。一九五三年(昭28)六月～一一月、河出書房刊。初山滋装丁、各巻色刷り口絵二葉入りのA5判、各三五〇ページ前後。構成は、

©1988　日本児童文学学会

第一巻 関東、第二巻 中部、第三巻 東北・北海道、第四巻 近畿・中国、第五巻 四国・九州、第六巻 国民童話編。各巻末に伝承童話論と解題を付す。およそ三〇〇話を精選して収録。伝承童話を児童に最善、最適と考え、表現の上でも直ちに児童に読めるようにと標準語で再話されている。

（斎藤寿始子）

日本童画会（にほんどうがかい） 一九四六年（昭21）松山文雄の尽力により武井武雄、初山滋など一五名の創立準備委員により「民主々義的なこどものための美術を創造し普及する」目的をもって五六名の会員により結成。日本児童文学者協会をはじめ各種民主団体とも連繋、その目的に沿うため五二年の破防法あるいは警職法案にも反対声明を出すなど運動団体的性格を指向したが、社会的変化、ことに出版状況の商業主義的傾向の強化および会員増加に伴う諸要求に応じ、五六年「童画の研究向上普及、著作権の擁護、新人の育成、相互扶助、他団体との連繋と協力」と目的（会則）も変更され職能団体的性格を強めた。四七年より開催された童画展がしだいに会の中心的課題となり、芸術的志向会員と商業主義的傾向の会員とを内包する矛盾が、六〇年安保の政治行動参加を契機として顕在化、六一年一〇月解散（会員百六十数名）するに至った。しかし敗戦後文化国家として再出発した日本の児童文化の一翼を担い、戦後派童画家の指導育成に貢献した社会的文化的意義は大である。

（久保雅勇）

日本童画家協会（にほんどうがかきょうかい） 一九二七年（昭2）岡本帰一、川上四郎、清水良雄、武井武雄、初山滋、深沢省三、村山知義ら近代童画揺藍期に活躍した七名によって結成。日本橋丸善ほか大阪三越などでも童画展を開催し童画芸術の発展と啓蒙に貢献したが四三年ごろ時局緊迫に伴い情報局の要請により、「新ニッポン童画会」「童心美術協会」などとともに「日本少国民文化協会」に統合された。第二次大戦後、六一年日本童画会解散に伴い武井武雄、初山滋、川上四郎（のち客員）、黒崎義介、鈴木寿雄、林義雄、安泰、井口文秀（安とともにのち退会）らが童画芸術の発展のため前記協会とは無関係に命名結成。六二年日本橋東急において創立展開催以来同店の呼びもの的恒例催しものとなったが、会員の老齢化により林以外逐年物故。八五年第二三回展をもって同会は解消された。童画史上不可欠の画家たちの最後の活動拠点となった点で意義深い。

（久保雅勇）

日本童謡（にほんどうよう） 日本童謡協会の機関誌として一九七〇年（昭45）三月創刊。季刊。発行所は学習研究社。B6判六四ページ。童謡の中央専門誌としての性格をもたせ、日本童謡の振興を図ることも目的として発行された。内容は、童謡に関する座談会・作家作品を含め、研究論文・作品・応募作品など童謡に関しての広範囲

©1988 日本児童文学学会

にわたって編集している。一九七三年(昭48)二月冬号、通算一二号で発行元との関係で発売中止となった。

(菅沼康憲)

日本童謡協会(にほんどうようきょうかい)　一九六九年(昭44)二月創立。童謡の振興を図り、その発展向上に寄与することを目的とした童謡著作者(詩人、作曲家)で構成された組織。日本音楽著作権協会に所属する会員も多く、その著作権、生活権の擁護も考慮されている。初代会長は、サトウハチロー。事業としては毎年「日本童謡賞」を設け、前年度の全童謡業績を対象に、優秀な作品に対して賞を贈る。また会員新作による定期演奏会「童謡祭」が催され、発表作品は楽譜集及びレコード化されている。出版事業としては「季刊どうよう」を刊行、一般購読の会員三〇〇〇名による詩、曲の発表や交流の機関誌として活動するほかに、年四回の会報を発行している。八三年には、わが国初の「日本童謡展」を開催。八六年には、国際交流基金の協力により大英図書館はじめ、世界の図書館、文化施設に「日本童謡資料」を寄贈し、国際交流を図っている。また各新聞社や企業と共催の新しい童謡作詞・作曲の一般公募が続けられており、現代の新童謡運動となっている。

(河村順子)

日本童話会(にほんどうわかい)　童話研究、教育団体として「今日の児童文化が明日の祖国文化をつくる」をスローガンに一九四六年(昭21)二月後藤楢根によって創立された。同年五月機関誌「童話」を創刊。会員の創作、研究を掲載して新人作家の育成に努める一方、口演、劇などにわたる活躍を展開して戦後の児童文化の興隆を図った。また六四年には日本童話会賞を設定し、今も毎年受賞者を送り出している。雑誌も毎月刊行され、八七年六月現在で通巻四一六号を数え、創立四〇周年を記念して創刊号より一〇〇号までが復刻版として刊行された(全一三巻・補巻一)。主な執筆者として秋田雨雀、小川未明、佐藤さとる、千葉省三、坪田譲治、寺村輝夫、長崎源之助、浜田廣介、與田準一などがいる。児童文学の発展に寄与したとして六六年には第一回モービル児童文化賞を受賞、会長の後藤楢根も第二回吉川英治賞(一九六八)を受賞した。現在会員約三〇〇名、児童会員約一〇〇〇名。

(西本鶏介)

日本童話協会(にほんどうわきょうかい)　蘆谷蘆村の主導によって一九二二年(大11)五月二一日創立された。会則によると「童話の研究及び一般児童芸術の改善普及を計る」目的を掲げ、講演、研究会、機関誌「童話研究」の発行、童話に関する書籍の発行などの事業を推進し、支部組織をもち、全国的規模の活動を展開した。創立当時の役員は理事長に蘆村、常任理事に内山憲尚、樫葉勇、理事に安倍季雄、葛原茲、弘田龍太郎、藤沢衛彦、上沢謙二、顧問に巌谷小波、坪内逍遙、松村武雄、久留島武彦、岸辺福雄が推されている。蘆村中心の口演童

©1988　日本児童文学学会

話家主体の観を呈したが、当時唯一の児童文学・児童文化の研究誌であった。「童話研究」による研究活動の振興と口演童話の興隆に貢献した。『綜合童話大講座』一二巻(一九三三～三七)の刊行は、児童文学講座の先駆的地位を占めるもの。ほかに蘆村『童話学講話』、武彦『童話術講話』などの口演技術書の出版も盛んに行われた。記念行事として「アンデルセン五十年祭」(二五)、「同童話百年祭」(三五)、ソビエト対外文化連絡協会の要望に応じて日露協会と結んで(二八)「日本児童図書及び児童製作展」をモスクワで開催。日本の児童図書、児童画、童謡楽譜など一千余点が海外で展示された最初の行事となった。四〇年「日本児童文化協会」(日本少国民文化協会の前身)に統合され、一八年間の歴史を閉じた。

(滑川道夫)

日本童話選集 にほんどうわせんしゅう　童話作家協会の年刊作品集。第一集(一九二六)～第六集(三一)は丸善株式会社発行。第七集(三二)～第九集(三五)は上級用と下級用の二巻立てで巻ごとに書名を変えて四條書房発行。第一〇集～第一三集に当たる作品集は『日本童話名作選』第一集(三七)～第五集(四一)として金の星社発行。一九三九年以降、ほかに童話作家協会は戦時協力の『日満支親善・ひらがな童話集』(三九)、『東亜児童親善童話集』(三九)、『銃後童話集』『日の丸部隊』『銃後童話読本』『日本精華物語』(いずれも四一)の作品集を発行した。会員の自選作品集であった『日本童話選集』は、最終段階において自選から幹事選となり、協会は戦時体制強化による統制を受け、「日本児童文化協会」(少国民文化協会の前身)に統合され一五年にわたる作家集団の歴史を閉じた。この年刊選集は、童心主義童話→生活童話→少国民文学への過程を反映しているばかりでなく、創作童話と口演童話のかかわり合い、児童文学研究の状況、童画の発展をみる上で貴重な文献といえる。

(滑川道夫)

日本人形劇人協会 にほんにんぎょうげきじんきょうかい　日本の専門人形劇人の相互の親睦とその社会的、芸術的地位の確立を図り、日本の人形劇の発展に資することを目的に、一九六七年(昭42)に設立された。専門的に人形劇に携わる俳優、演出家、美術家、経営制作者などで組織されている。テレビ出演料のランクの改定、年金加入など、地位生活向上の問題から、上演の企画、プロデュースまで幅広い活動をしている。関西にもブロックが置かれ、活動している。機関誌「日本人形劇人」を発行。

(宇野小四郎)

日本の子供 にほんのこども　児童雑誌。一九三九年(昭14)六月～四三年(昭18)一月。発行所は四二年一二月号まで文昭社、最終号は中央公論社。A5判。編集は、三九年九月号まで望月芳郎と太田博也が当たったが、以後は望月が主に担当、中央公論社に身売りされた最終号

©1988　日本児童文学学会

は藤田圭雄の編集になる。表紙に「小学課外読物」とうたわれ、童話、童謡のほか、漫画などもりだくさんの内容で出発し、当初は小川未明、塚原健二郎、川崎大治らが力作を寄せたが、のちスリラーものや戦争ものを載せるようになり、発刊の主旨に反してやや低俗な雑誌となって身売りすることになった。（五十嵐康夫）

日本の子ども（にほんのこども）　第二次大戦後、子どものための良心的な雑誌といわれた「赤とんぼ」「子供の広場」「銀河」「少年少女」など、ほとんどすべてが終廃刊になった後に、一九五〇年代の半ばから約一三年続いた子どものための総合文化雑誌。講学館（福世武次社長）発行。五五年（昭30）一一月創刊、六八年（昭43）八月廃刊。低学年版の「にっぽんのこども」も六一年五月創刊したが六二年九月廃刊。家永三郎、今井誉次郎、上原専禄、金沢嘉市、木下順二など一五名の進歩的文化人を編集賛助員に健闘したが、続かなかった。（冨田博之）

日本の子どもの詩（にほんのこどものし）　児童詩の選集。日本作文の会が編集し、岩崎書店の発行になるもので、戦前・大正期から、現代に至るまでの、日本中の子どもたちがつくった児童詩を、各県別、四七巻にまとめたものである。その刊行は、一九八〇年（昭55）二月にはじまり、八五年（昭60）二月に完結するという五年間にわたるものであった。八五年、サンケイ児童出版文化賞大賞を受賞した。ここに収められた作品は、六十有余年間に及ぶ日本の子どもたちが、その時代、その地域で、何をみつめ、どう感じ、どのように詩作したかがわかるだけでなく、長い間の子どもたちの精神史でもあり、生活史ともなっている。また、「赤い鳥」時代の感覚詩から、生活詩への歩み、そして、戦時中の詩、さらに今日の児童詩に至った、日本の児童詩教育の道程をもみることができる。なお、各巻の巻末には、各県の「児童詩指導の歩み」があり、各県の児童詩教育の歴史が、指導者名とともに記されている。（亀村五郎）

日本の児童文学全集（にほんのじどうぶんがくぜんしゅう）　日本で出版された児童文学全集は、普通 (1)日本児童文学全集 (2)世界児童文学全集とに分けて考えられる。全集の本来の意味は関連するすべての著作を収集した書物を指すが、それは(1)(2)とも物理的に不可能で、したがって選集とするのが正しい。だが日本あるいは世界の児童文学状況の概観を目的としているものを、現在では全集といい習わしている。(2)はほとんど国家別に編まれ、(1)は作家別または編年体で編まれることが多い。(1)の作家別の例には『日本児童文学大系』全三〇巻（ほるぷ出版）、編年体には『日本児童文学大系』全六巻（三一書房）がある。特定のジャンルに従った全集、たとえば児童劇や童謡・少年詩を編んだ全集、また口承文芸を子どものために編んだ全集、さらには狭義の児童文学の圏外である名作全集や古典を再話した全集もあり、これ

©1988　日本児童文学学会

らは(2)にもみられるが、ほとんど(1)の分野で出版されている。個人の著作を集めた全集には『校定新美南吉全集』全一二巻・別巻二(大日本図書)などがあり、個人の著作に限定されてはいるが、その名に値する全集が出るようになった。全集的性格の出版は、すでに明治時代に巌谷小波編で博文館から全二四巻の『日本昔噺』、全一〇〇巻の『世界お伽噺』として現れた。また一九五三年ごろ児童対象の全集出版ブームが起き、その一つに『世界少年少女文学全集』全五〇巻(創元社)があった。

(尚川幹雄)

日本之少年 にほんのしょうねん 一八八九年(明22)二月、博文館より創刊された児童雑誌。須永金三郎編集。創刊時四〇ページほどの小冊子であったが、児童雑誌発展の気運の中で充実化していった。論説、歴史、理科、数学、英語、文芸的読み物、加えて投書という体裁で、いわば総合的学習児童雑誌といえる。九四年(昭27)二月、博文館の児童雑誌再編成によって終刊し、九五年創刊の「少年世界」に、「幼年雑誌」および「学生筆戦場」とともに統合された。

(岡田純也)

日本の童画 にほんのどうが 一九八〇年(昭55)一二月から、八一年一一月にかけて第一法規から刊行された全一三巻の童画集成である。明治期の武内桂舟から、現代の安野光雅まで体系だてて収録されており、B4判変型、六〇ページのカラー図版で、定価二八〇〇円。上笙一郎が全巻の構成・解説をしている。刊行意図は、室町時代の奈良絵本でスタートした子どものためのイラストレーションが、明治期のお伽絵、大正期の童画と長い歴史をもったにもかかわらず、集大成されたことがないのは、映像文化全盛の時代にきわめて遺憾であり、ここに児童出版美術の精粋を集めて江湖に提供するとしている。収録作家は、本田庄太郎、武井武雄、黒崎義介、樺島勝一、加藤まさを、中原淳一、いわさきちひろ、丸木俊、赤羽末吉、長新太、藤城清治、宇野亜喜良、太田大八ら三九名。遅れている児童出版美術の研究に貴重な一石を投じたものといえる。

(二上洋一)

日本文学教育連盟 にほんぶんがくきょういくれんめい 文学教育の理論と実践の創造的研究をめざす民間教育団体。一九五七年(昭32)、「文学教育の会」として発足した。六一年、日本文学教育連盟と名称変更。発起人には教育関係者のほか、菅忠道・来栖良夫・関英雄・巽聖歌・古田足日ら児童文学者が多数加わっていた。このことが連盟の性格をも決定することとなる。以後研究と運動の指標を「国民教育としての文学教育」「芸術教育としての文学教育」に求め、文学教育独自の教育的機能を追求している。『講座文学教育』三巻(一九五九)、『戦後文学教育研究史』上下(六二)、『小学校国語科文学教材事典』(七二)などの出版活動のほか、現役児童文学作家を招いての全国集会、講座を積極的に行い、児童文学の普

©1988 日本児童文学学会

及にも大きな役割を果たしている。機関誌「季刊文学教育」には、文学教育の理論と実践が毎号豊かに展開している。（関口安義）

日本民話の会（にほんみんわのかい）　一九五二年（昭27）二月に誕生したいわゆる第一次「民話の会」と、六〇年代末に発足した現在の「日本民話の会」との両者を併せて、戦後三十数年に及ぶ民話運動の推進母体と考えていい。前者は木下順二の『夕鶴』を契機として歴史学、国文学、民俗学、演劇などさまざまな分野の人々が集まって民話を今日の創造の視点に立って論じ合うところから出発したものであった。五〇年代末に二年間にわたって機関誌「民話」（未来社）を発行した。この前者の考え方や姿勢は基本的に後者の運動に受け継がれた。民族の伝統の継承と創造という基本線を、再話の方法と実作、語りの問題、現代民話の収集と整理（松谷みよ子）などの実践を通じて具体化し、戦後の文化運動の中で重要な役割を果たしている。機関誌「民話の手帖」（国土社）をはじめ数々の出版物を刊行している。（吉沢和夫）

日本昔噺（にほんむかしばなし）　巌谷小波による昔話中心の再話叢書。一八九四年（明27）七月から一八九六年（明29）八月までに全二四冊を博文館より刊行。著者名は、「大江小波」の別号を使用し、「東屋西丸」筆記の形式をとる。厳密な意味での再話ではないが、昔話の集大成を行い活字化した功績により小波は「日本のグリム」と呼ばれる。『日本お伽噺』（全二四冊）、『世界お伽噺』（全一〇〇冊）と合わせて小波三大叢書と呼ばれ、明治時代の児童文学を方向づけた。のちに、『世界お伽噺』一〇〇巻完成を機に『和英対訳日本昔噺』（一九〇三～〇四）の際改訂した残り一二冊にも筆を加え、合本の袖珍判全一巻を出版（〇八）した。小波独自の新かな遣いを用い、冗句を削り、平明な表現を意図した。（畠山兆子）

日本昔話大成（にほんむかしばなしたいせい）　日本昔話のタイプインデックス（話型索引）、一二巻、関敬吾編、野村純一協力。角川書店発行、一九八〇年完成。全体を三部に分かち、動物昔話、本格昔話、笑話としている。これはA・アールネ、S・トンプソンのタイプインデックスの分類法を大体踏襲したもので、昔話の国際的比較研究に資するという目的に沿ったものである。各話型ごとに代表的な話例を全文記載し、その後に日本列島を南から北へ向けて各地域ごとの資料の梗概を記し、全体として昔話資料集的な役割も果たしている。関敬吾は五〇年から五八年にかけて『日本昔話集成』六巻を完成させているが、これは明治末年から敗戦前までの採集資料を分類整理したもので、国際的に高い評価を受けた。だが戦後三〇年間に採集された資料は敗戦前の数十倍の量となり、また新しい話型も発見された。そこで戦前戦後の膨大な採集資料を全く同一の原則に基づいて

©1988　日本児童文学学会

再編整理し直したものが『日本昔話大成』である。（吉沢和夫）

日本幼年（にほんようねん）

日本幼年童話全集（にほんようねんどうわぜんしゅう）　全八巻、A5判、各巻平均二八二ページ、河出書房。一九五四年（昭29）一〇月から五五年六月にかけて配本。編集代表、小川未明、坪田譲治、浜田廣介、酒井朝彦、與田準一。童話編六巻、童謡編一巻、幼年劇集一巻より成る。近代児童文学の幼年向き名作アンソロジーで、同じ河出書房刊の『日本児童文学全集』全一二巻の姉妹編といえる。童話編第三巻を女流作家の作品だけで埋めるなど、斬新な編集が目を引いた。（関口安義）

日本歴史譚（にほんれきしたん）　明治期の小学高学年向き歴史読み物叢書。一八九六年（明29）一二月から九九年一二月まで全二四冊、大和田建樹著、博文館刊。A4判、各冊七五ないし九〇ページ、挿絵各七、八枚。『日本開闢』より最終編『威海衛』まで、聖徳太子、源義経、日蓮、楠木正成、豊臣秀吉、水戸黄門、四十七士など、すでによく知られた歴史上の人物を取りあげて、教育勅語に即した方向で物語風に述べ、時流に乗った。第二編以降は福島四郎の代作との説もある。（勝尾金弥）

ニューベリー　ジョン John Newbery　一七一三～六七　イギリスの出版業者。イングランド中部の農家に生まれ、長じて印刷出版業の見習いとなる。一七四〇年代のはじめにロンドンに出て、最初の子どもの本『*A Little Pretty Pocket Book* かわいいポケット・ブック』（一七四四）を発行し、セント・ポール寺院境内に出版の本拠を構えて本格的な出版業に乗り出した。ニューベリーの出版物はS・ジョンソン、ゴールドスミス、C・スマートらによる大人向けの本が多いが、彼の名はむしろ子ども向けの出版物によって知られている。子どもの心の要求に合わせた本の出版に意を注いだ最初の人物だったからである。子ども向けの雑誌の発行などに加えて、実益的な知識の提供の中にも子ども本来の想像力をくすぐる数々の本は、当時の哲学者ジョン・ロックの影響のもとに豊かな創造性に富み、多くの子どもたちの心を惹きつけるところとなった。

©1988　日本児童文学学会

『*The History of little Goody Two-Shoes* くつ二つ物語』（一六五）などは刻苦勉励の末に幸運をつかみ取る筋合いに教訓臭が漂うものの、空想的な冒険性が織り込まれた新しい型の物語だった。また、ニューベリーは自ら伝承童謡集『*Mother Goose's Melody* マザーグースのメロディ』（九一）を編んでいるが、伝承童謡にマザーグースの名が英語で冠せられたのは、これが最初である。一九二二年設置のアメリカのニューベリー賞は彼にちなむものである。（定松　正）

女人童話会（にょにんどうわかい）

ニールセン　カイ Kay Nielsen 一八八六～一九五七　デンマークの挿絵画家、舞台美術家。舞台監督で俳優の両親のもとコペンハーゲンに生まれる。一七歳でパリに出て画塾に学び、東洋美術やロシアバレーの影響を深く受けた。一九一二年ロンドンに移り幻想的、耽美的な表現で挿絵画家として活躍、『太陽の東月の西』（一九一四）で注目を浴びた。母国に帰り国立劇場の舞台美術やアンデルセン、グリムなどの挿絵を描く。三六年ディズニーの『ファンタジア』に協力を求められたが成功せず、戦争中もアメリカにとどまり、晩年は失意のうちにアメリカで歿した。（松居　直）

人魚（にんぎょ）　マーメイド（イギリス）、メロー（アイルランド）。最古の記録は、『アイルランド王国年代記』（一七世紀）中の紀元八八七年に海に着いた人魚。一般に姿は腰から上は美しい乙女で、魚の尾をし、手に水かきがあり、月夜に岩の上で鏡を手に長い髪を櫛けずり、甘い歌声で人を水の中に引き入れおぼれさせる。人魚は海から流れをさかのぼって淡水の河や湖に現れるが、人魚が姿を現すのは、嵐や災難の前触れである。人間の漁夫と恋に陥るが、生まれる子どもは体中うろこで覆われている。コーンウォール地方の伝承物語「ルウティと人魚」や「キュアリーの年寄」などには同主題がみられる。人間に捕まると人魚は放してもらうのと引き換えに願い事をかなえたり薬草の知識を授けたりする。ギリシア神話の泡から生まれたアフロディテの変形ともいわれ、人間の王子に恋をし、泡となって消える人魚姫と連関する。メローの男性は緑の髪と歯、

©1988　日本児童文学学会

赤い鼻と魚の尾と豚の目をした醜い姿で、水に潜る赤い帽子をかぶり海底で人間の魂を集める。（井村君江）

人形劇（にんぎょうげき）　一定の目的で人形を操作することが古代からあったことは、エジプト、ギリシア、インド、中国などで記録されているが、これらは、からくりや糸操りであった。その後、棒使い人形、影絵劇、片手使い人形なども広まるが、発展の中心はアジアにあった。我が国は、棒使い人形を中心に、からくり、糸操り、片手使いなど豊富な形式を発展させて、高度な人形劇芸術を生み出した。ヨーロッパではイタリアの影響のもとに各国が独自の人形劇をもったのは一七世紀以降のことであった。近世から近代にかけて世界共通の現象として、民衆に愛された片手使い人形の進出がある。現代人形劇は、一九二〇年代の演劇運動、美術運動の中から起こったが、世界中に急速に普及したのは、子どものための文化財としてである。我が国でも第二次大戦後この面でめざましい発展定着をみせ、多くの専門劇団を生み、アマチュアの活動も地域を中心に盛んに行われている。（宇野小四郎）

任大星（にんたいせい）→レン ターシン
任大霖（にんたいりん）→レン ターリン
任徳耀（にんとくよう）→レン ドウヤオ

ヌ

ヌワパ　フローラ Flora Nwapa 一九三一～　ナイジェリアの作家、教育者、出版人。アフリカ女性の生き方をテーマにした大人向けの小説『*Efuru* エフル』（一九六六）、『*Idu* イドゥ』（六九）、『*One is Enough* 一つでたくさん』（八一）などを書いて国際的に知られるが、一九七七年にはエヌグに印刷・出版会社タナ・プレスを創立し、アフリカ人作家および画家による児童書の出版と普及に努めている。自作の児童向け作品に『*Mammy Water* ふしぎな湖』（七九）、『*Journey to Space* 宇宙への旅』（八〇）などがある。（さくま ゆみこ）

©1988　日本児童文学学会